【事例】 道の駅の拠点性を利用した集客交流モデルの構築	
社会資本の概要	【所在地】 千葉県南房総市 【社会資本の種類】 道路 【社会資本の名称】 道の駅とみうら・枇杷倶楽部 【事業主体】 南房総市（旧富浦町）
配慮の概要	地域産業と文化、情報の拠点となる道の駅を十分に活用すべく、商品開発から協力業者（農家、民宿など）の組織づくり、旅行会社への売り込み・受注、クレーム処理までを一括して行うしくみを構築している。 【実施開始時期】 1993 年
位置図	
施設の状況写真	 「一括受発注システム」の仕組。 特産品がところ狭しと並べられている店内の様子。

観光との関わり	南房総市（旧富浦町）は特産品房州枇杷と豊かな自然を特徴とする観光地である。以前は避暑地として有名であったが、近年は夏型観光よりも一足早い春を堪能できる冬の観光地として注目を集めるようになっている。また、特産の枇杷加工事業と商品開発、体験型観光農業による観光客誘致と施設整備により、観光産業において「道の駅とみうら・枇杷倶楽部」が大きな役割を果たすようになった。その活動における創意工夫は、2000 年に開催された「道の駅グランプリ 2000」においても高く評価され最優秀賞を受賞している。そして様々な取り組みの結果、海水浴の衰退で減少した観光客数をほぼ同数まで盛り返すに至った。
配慮事項	**○道の駅とみうら・枇杷倶楽部活用の経緯** 旧富浦町は以前、夏季の避暑地として活況を呈した宿泊型の観光地であったが、高速道路網の整備により日帰り旅行の対象となる地へと次第に変化していった。その結果、宿泊施設が減少し建設関係へも影響が及んでいた。そこで町は地域を再び活性化させるために「地域産業と文化、情報の拠点」を創出する施策を模索していた。このような状況の中、地域の連携機能や情報発信機能等を有する施設として国が示した「道の駅」の構想と新しい拠点のコンセプトが重なったため、道の駅の諸要件を満たすための調整を行って、「道の駅とみうら・枇杷倶楽部」が整備された。施設の整備後はハード（施設）よりもソフトの整備を充実させるべきという方針のもと、様々な形で道の駅を積極的に活用している。 **○道の駅を活用するための下地作りの工夫** 旧富浦町は財政基盤が強固とは言えなかったため、施設整備後に失敗することのないよう予め施設工事着手前に仮設店舗でのシミュレーションを実施した。また、道の駅を運営するために設立した町100%出資の株式会社では、町長を中心に商工会長や観光協会長等を役員とし、観光による町の活性化に向けて町が一致団結できるような組織づくりを行った。 **○道の駅を活用する際の工夫** 道の駅が地域の小規模業者（農家、民宿など）と旅行会社との一括窓口となることにより、一年を通じて安定した観光客の誘致を行うことができる仕組みを構築した。具体的には、下記の役割を道の駅が担う仕組みである。 ① 味覚狩りや農業体験、食事などの料金やサービスを規格化し、各種メニューをパッケージ化した商品を開発する ② ①の商品やサービスを提供する協力業者（地域の農家、民宿など）の組織作りを行う ③ 旅行会社にパッケージ商品を売り込む ④ 旅行会社からの注文を受ける ⑤ 協力業者への送客の配分を行う ⑥ 旅行会社への精算、協力会社への支払、クレームの処理を一括して行う、 その後この仕組みは扱い件数の増加に対応するため、「一括受発注システム」としてコンピュータシステム化され、現在も進化を続けている。 また、地域の伝統的な特産品である房州枇杷が特産品としては全国的に希少であったことと、規格外の果実が大量に廃棄されていたことに着目し、房州枇杷に絞って商品開発を行ったところ、ねらいどおりヒットとなり、オリジナルブランドとして確立するまでに至った。このことにより、上述した仕組みづくりなどの運営を収益面から支えることができるようになった。
連絡先	南房総市役所　商工観光部　観光プロモーション課　TEL:0470-20-4003 http://www.mboso-etoko.jp/